

翻訳

## Ed. シュプランガー「ヴィルヘルム・ディルタイ」

Wilhelm Dilthey.

著 エドゥアルト・シュプランガー  
Eduard Spranger

訳 山 元 有 一  
Übersetzt von Yuichi Yamamoto

鹿児島女子短期大学

**Schlußwort [key word]:** Dilthey, Nachruf, Spranger, hermeneutische Wendung

キーワード: ディルタイ追悼, シュプランガー, 解釈学的転回

### [訳者解題]

本稿はエドゥアルト・シュプランガー (1882-1963) によるディルタイ追悼文の全訳である。これは1911年10月23日月曜日、つまりディルタイの同年10月1日日曜日の死去後早い段階で、『ベルリナー・ターゲブラット』新聞付紙「時代精神」の第9面から第10面にかけて掲載された (N065: Spranger, Eduard: Wilhelm Dilthey. In: Der Zeitgeist. Beiblatt zum "Berliner Tageblatt". 1911, Nr.43, 23.Okt.)。当時、シュプランガーは9月に員外教授としてライプツィヒ大学に招聘されており、長年住み慣れたベルリンを離れていた。恩師ディルタイの死はその直後のことであった。

それ以前のベルリン大学在学中にヴィルヘルム・ディルタイ (19.Nov.1833-01.Okt.1911) の門を叩きながらも、彼が与えたヤコービに関する課題の重圧に耐えられずに彼の下を去り、フリードリヒ・パウルゼンの下で『歴史学の基礎』で学位を取得したシュプランガーは、その後しばらくの交信不能状態の後、教授資格論文『ヴィルヘルム・フォン・フンボルトとフマニテートの理念』が契機となり、その関係を改善させている。そして、ディルタイの最晩年の作業の一つ、シュライエルマッハー伝第二巻の共同研究者として、彼はシュプランガーに声をかけるが、彼自身の死によってこの作業は叶わなかった。とはいえ、関係改善の結果は、既に1911年のディルタイ存命中の彼の論文「想像力と世界観」に現われている。これが収められた『ヴィルヘルム・ディルタイの叙述における世界観, 哲学, 宗教』は、ディルタイの弟子たちや関係者らによる記念論集であり、いわば彼への尊敬の気持ちを込めたものであって、その列に加えられたことは、シュプランガーがディルタイ学派の一員として認知されたことを意味していたとも言える。

こうした事情も関係していたのであろうか、シュプランガーにはディルタイの死去に対する言及が複数存在する。本稿で訳出する新聞記事とは別に、彼は年内には『文化史アルヒーフ』誌に短い追悼の文章を書いている (N672)。ケーテ・ハートリヒ宛ての書簡で「月曜日に私はアカデミー哲学協会ディルタイに関して話をします」(ES-KH, 10.Nov.1911) と伝えていることから、この文章はこの協会での11月15日月曜日の講話と関係しているものと思われる。また、この追悼文から1912年3月15日の、最もよく知られており、既に邦訳も存在する彼のディルタイ追悼講演 (N072) に至るまでには、もう一つの追悼文もある。というのも、1912年3月の追悼講演についての情報を提供したケーテ・ハートリヒ宛ての書簡では、次のように語られているからである——「ヨハヒムスタールのギュムナジウムがディルタイの評価のための追悼式にアカデミーや大学、官庁を招こうとしています。私は講演を行うことになりませう。でも、3月までに連絡が来ないのなら、私は断ることになるでしょう。追悼がコメニウスの冊子に載っていることを、貴方は既に知っていらっしゃるでしょう」(ES-KH, 29./30.Nov.1911)。この「コメニウスの冊子」はコメニウス協会の月刊誌 (Monatshefte der Comenius-Gesellschaft für Kultur und Geistesleben. Band 20[N.F.3], 1911, S, 195-202) のことであるが、テオドール・ノイによるシュプランガーの文献目録 (Tübingen: Max Niemeyer, 1958) やその後の補完作業には見られない、新たな文献である。とは言うものの、この追悼は、ここで我々が翻訳する新聞記事を、出版者や編者の許可を得て改めて文字にしたものである。ディルタイがコメニウス協会のメンバーであったことから都合よく運んだのであろう。この再録にはシュプランガーの追

悼以外の企ても深読みしたくなるが、いずれにせよ、ディルタイが教育活動を開始したヨアヒムスタール・ギュムナジウムでのシュブランガーの追悼講演を含めて、ディルタイの死後半年の間に少なくとも四つ程度の追悼の声を我々は聴くことができるわけである。さらには、追悼文ではないが、1912年3月以降にも、ディルタイの死去に関連づけながら、シュブランガーは『ヒストリーッシュェ・ツァイトシュリフト』誌においてディルタイの最後の著作『精神諸科学における歴史的世界の構成』(1910年)についての書評を書いている(LbDilthey1912)。当時のものとして確認できる唯一の、この書評は、ゲオルク・ミッシュ(1878-1965)やヘルマン・ノール(1879-1960)など、ディルタイのいわば側近によって書かれるべきものであったと思われるだけに——そして、この二人は後にディルタイを回顧しているものの、彼らの追悼の存在を我々は今のところ知るところができなかった——、これが一時期ディルタイと距離のあったシュブランガーの手になるものであったことは、いささか奇妙と言えなくもない。概して言えるのは、ディルタイの死に対するシュブランガーの対応はかなり迅速であり、しかも行動的であったことである。

もちろん、ディルタイの突然の死に際して、シュブランガー以外にも多くの人々が反応したのも当然である<sup>1)</sup>。例えば、本稿が訳出する新聞記事に先立つディルタイ死去直後の追悼には、例えばカール・シュトゥンプフ(1848-1936)のものがある。かつてベルリン大学への招聘にあたってディルタイの協力を取り付けていたシュトゥンプフは(vgl. Gerhardt/ Mehring/ Rindert1999), 1911年10月10日にフランツ・ブレンターノに宛てて自らが弔辞を述べたことを伝えていた——「私は……大学と私たちの学部を代表しなければなりません。7日のことでした。……幾つかの弔辞が示していますように、私や貴方に友好的であった人物が彼の弟子たちやその他の広いクライスによって法外なほどにかなりな評価をなされているのも当然のことです」(Kaiser-el-Sanfti, Margret[hrsg.]: Franz Brentano-Carl Stumpf-Briefwechsel 1867-1917. Frankfurt a. M.: Peter Lang, 2014, S.419)。また、やはりかなり早めの対応としては、劇作家のフーゴ・フォン・ホフマンスタール(1874-1929)の追悼文もある。フッサールなど、様々な哲学者とも関わりのあった彼は、この文章でディルタイとの対話から得られた印象を詩情豊かに記している——「翼をはばたいて飛ぶ会話、小止みなき前進、年齢を超えてしまった眼光の、聡明で喜ばげな閃めき——」(Hofmannsthal 邦訳, 242頁)、「——これほどまで遠くを眺めやる人がいるだろうか、こんなに深くを窺い見る人がいるだろうか」(ebd., 243頁)。彼は思索者ディルタイの中に詩人を見ているようである。

そして、即座の対応ではないが、ディルタイ追悼は練ら

れた形で登場している。例えば、ディルタイのアカデミーでの作業を引き継ぐこととなったベンノ・エルドマン(1851-1921)は、1912年7月4日に王立プロイセン学術アカデミーの公的な会議で追悼講演を行っている。そこで彼はディルタイの研究の流れをまとめて、「自らの歴史的理解の繊細な感覚」を「繊細なタッチで素描した」ディルタイのライフワークを「前代未聞の闘い」(Erdmann1912, S.3)と評している。エルドマンによれば、「彼は絶えず大部分類縁性を感じていたシュライエルマッハーの現実の追体験から出発し」(ebd., S.15)、学問が「生計を営むための手段となる仮説の資本」(ebd., S.11)を根源的に形而上学に求める心理学、例えば対象把握的な「自然科学との間違った関係」(ebd., S.11)におけるように、人間の歴史的社会的生を一般的因果論的に構築しようとする心理学を拒否して、こうした方向性とは異なる「直接的な体験の歴史的現実や展開における心的理解や追体験の再発見における心理的状态の覚知へと導く」(ebd., S.13)一方で、その「理解が主観性の狭さから、全体的なものや一般的なもの領域へと越え出ていくことによって」(ebd., S.14)、当初の個人的で心理学的な立場が「客観的に精神的なものが取って代わる」(ebd., S.16)ことになったとしている。だが、この追悼講演でエルドマンは、ディルタイの問題点を「厳密な学問的解決が挫折するアンチノミー」として指摘している(ebd., S.16)。つまり、彼の相対的傾向がそれであり、彼の導入した理解や追体験が「締めくくる体系性の力を阻止し」、「体系性のへの試みへと入って破壊」しているとして(ebd., S.17)、彼の研究の経過をヘーゲルへの対抗(主観性)からヘーゲルへの接近(客観性)と規定し(vgl. ebd., S.6, S.14)、彼の前代未聞の闘いを「心高まる演劇……、この悲劇的な闘い」(ebd., S.17)と、講演の終わり付近で言い換えている。

また、ベルン大学哲学教授アンナ・トゥマルキン(1875-1951)——彼女は1898年にディルタイの下で教授資格を得たヨーロッパ初の女性大学教授であった——も、「彼の思考は我々の時代のその他の哲学者の場合にはないほどに、個人的体験の流出となっていた」(Tumarkin1912, S.143)と述べて、ディルタイの「非常に繊細で精神的刺激に対する、彼のめったにない感覚」(ebd.)を称賛している。だが同時に、彼女はディルタイが「芸術的な直覚と学問的な体系化の結びつきを通して……空想的な抽象としてではなく、むしろ直接的な真理において把握すること」(ebd., S.146)をも課題としたとしている。その一方で、「彼は自らの問題設定の深刻さと諸課題の広がりや深まりによってますます困難なものにしていった。……彼自身は解決されない謎を目の前にしながら、意気消沈して両腕を垂らしている。……こうして彼は結論へと至ることがない」

(ebd., S.143, 144) と、トゥマルキンのディルタイ評価には厳しい側面もある。エルドマンと同様に、彼女もディルタイの研究活動の中に悲劇を見ている——「個人的な体験の流出……。ここに彼の創造の独自性と偉大さ、しかしまた彼の創造の悲劇があった」(ebd., S.143)。とはいえ、彼になされる異議申し立ては「近視眼的」であり、例えば「相対性の危険」といった「異議申し立ては予想されていた」(ebd., S.148, S.151) と、彼女はディルタイを擁護もしている。

ところで、そうした追悼文の中でも、我々の本来の関心からすれば、シュプランガー以上に注目すべきであるのは、広い意味においてディルタイの弟子として含み入れることが可能なマックス・フリッシュアイゼン＝ケーラー (1878-1923) が『カント研究』と『ロゴス』誌で公にした二つの文章である。というのも、我々にとっては彼の文章では教育学に対するディルタイの意義が、他の人々の文章では見られないほどに明示されているからである。したがって、彼に関しては特に教育学との関連でディルタイ追悼を読解する必要がある。

まず、『カント研究』においてフリッシュアイゼン＝ケーラーは、確かに「固有の芸術的な才能」(Frischeisen-Köhler 1912a, S.164) を有していた「ディルタイは思想家にして詩人であった」(ebd., S.166) とホフマンスタールに似た見解を示すものの、哲学史ばかりでなく体系的哲学に対する彼の意義も認めている (vgl. ebd., S.161)。また、詩的感覚だけでなく、「ディルタイは精神史の天性の歴史家であった」(ebd., S.164) としてディルタイの歴史的感覚の豊かさも認める彼は、ディルタイの文献学的解釈の技量と目的を次のようにまとめている。「断章の再構成、成立と著作の意図の認識、著者における複数の著作の関連の把握、文学的運動における著作の著者の間の関係、こうしたものに彼は寄与し、確定し、続行した。この文献学的解釈は彼にとって一度も自己目的とはならなかった。その解釈は背後にある人格と作品の中にある精神様態を把握するための手段であるにすぎなかった。人間的個性化の問題が、ディルタイの歴史研究の本質的な問題である」(ebd., S.165)。彼はこうしたディルタイの目的の中に、教育学的なものの一つを読み取っていると考えることができる。『カント研究』の中では、「教育学」という語句は一度だけしか現われていないが、例えばエルドマンの場合では1888年の「普遍妥当的教育学の可能性」に関するディルタイの論文での、説明心理学に対する記述的分析的心理学の構想の変奏として教育学が言及されるにとどまっているのに対して (vgl. Erdmann 1912, S.12)、彼は歴史研究からディルタイにとって必然的なものとなった個性化 (人格教育) ——とおそらくはその釣りの一方の錘としての社会化 (国民教育、

ないしは職業教育) ——の問題をディルタイの中に見ている。「歴史的生成において、精神生活において個的なものや移ろいやすいものに発展の連関の中での地位を規定し、そうすることによってそれらをその権利において認識すると同時に、克服させる持続的な諸傾向を解明することが、いつでも目標である」(Frischeisen-Köhler 1912a, S.168)。したがって、ディルタイのライフワークは歴史研究に限定されるものではなかったとされる (vgl. ebd., S.166)。このように『カント研究』におけるフリッシュアイゼン＝ケーラーは、ディルタイが「際限のない課題」(ebd., S.172) に直面し続けたにもかかわらず、相対性を常に含んだ「歴史的意識にとどまり続けることはできなかった」(ebd., S.168) としている。

一方、『ロゴス』誌におけるフリッシュアイゼン＝ケーラーは、『カント研究』におけるディルタイ解釈をさらに整理しながら、哲学者としてのディルタイ像を浮かび上がらせようとしている。そこで彼は、「I 形而上学の現象学」、「II 自己省察の観点」、「III 世界観の理論」、「IV 精神科学の基礎づけ」という流れでディルタイのライフワークを時系列的に追いかけて、この経過の中で教育学の歴史と課題を見出そうとしている。それは彼が最後の節のタイトル「V 詩学と教育学」が示すところである。

フリッシュアイゼン＝ケーラーが詩学と教育学を併置したのは、彼がこの二つに同一の課題を認めるディルタイの姿に出会ったからであったであろう。詩的な創造においては諸体験が源泉であり、その創造の働きは確かにその経験の事実を一般化するのではないが——それ故に哲学者とは異なる態度を取る——、想像力を通してその事実の「現実の連関から解き放たれつつ実在性の仮象の中へと追体験」しながら、「より深い理解が生との関係を授けることになる一般的な諸傾向を捉え」、「生の経験の客観的な深化と拡大」へと至る (Frischeisen-Köhler 1912b, S.53)。しかも、そうした理解を可能とするために、「未来予見的なもの」も働いている。「詩的な創造作用の基盤には人格の体験、他者の諸状態の理解、理念による経験の拡大と深化が含まれて」おり (ebd., S.55)、それ故に「詩作は生との関係の探究の道具である」(ebd., S.54)。したがって、一つの詩作は確かに一時的に現われた個別形態にすぎず、この点で「現象性の命題」から出発する心理学の対象であるが、同時に「個体の最も高い傾向」、つまり人格や教養、さらには「多数の個体の諸連関」、つまり共同体や時代、文化における個別形態として心理学の対象を越え出ている (vgl. ebd., S.47)。彼は記述的分析的心理学の時代のディルタイを受容するとともに、解釈学の時代の彼、言い換えれば間主観性の心理学の時代の彼も受け入れている。そして、ここに当時まだ全くと言っていいほどに不明瞭であったディルタイ教



育学の可能性を彼が見ていたと考えることもできる。というのも、ある一人の、特殊な心的な状態にある詩人がある特殊な歴史的社会的状況において特定の詩作（芸術作品）を創造するように、個々の教育者は同様の状況下において個性化されつつも社会化された子どもたち（教育作品）を創造するからである。彼は、教育者の「芸術的行為」（*ebd.*, S.57）を取り上げている。教育学の課題は、個性化の側面においては「個人的な成長において獲得され確認されねばならない心的な目的論的構造連関から……教育の規則が心的生の成長に寄与」することの解明であり、これについては一般的妥当的な（個人的な完全性の形式的な諸条件の議論の）領域が記述可能である（*ebd.*, S.57）。他方、社会化の側面においては、その「内容上の目標はどの時代にも歴史的に規定されている」ために、具体的な教育問題はこの領域では解決されることはなく、したがって、「その問題は正確な専門家の知識と教育の歴史を根拠にして、政治家の天分や教育者の天分が共に働くある種の芸術的行為によって取り扱うことがもっぱら可能である」（*ebd.*, S.57）。とはいえ、このように彼はディルタイ教育学の可能性を指摘しつつも、「学問的な立ち遅れ」にあった教育学を、ディルタイが17世紀から「18世紀に形成されたその（精神諸科学の自然的体系の）最終的残余」であるとして闘いを挑み、教育学の普遍妥当性を拒否し続けたことを随所で繰り返すにとどまっているようにも見える。

ここで我々は少しばかり、過去から身を引いてみよう。これまでに見てきたこうしたディルタイ追悼の諸傾向を、ハンス＝ウルリヒ・レッシングは、ディルタイの受容史の一局面として二つの図式として示している（Lessing 1984, S.14-31）。一つのイメージは既に追悼の多くに見られるように、「歴史的ディルタイか、体系的ディルタイか」、あるいは「精神史家ディルタイか、哲学者ディルタイか」という二者択一であり、確かに「思想家にして詩人」というフリッシュアイゼン＝ケーラーの追悼での表現——これはトゥマルキンの1895年の学位論文の提出者であったルートヴィヒ・シュタインが、1903年のディルタイの70歳の誕生日のために『ドイッチェ・ルントschau』誌に寄稿した際の「敏感で繊細で追従を許さないほどに叙情的な思考の揺らぎに反応する詩人哲学者（Dichter-Denker）は、カントの厳格な形而上学的欲求の代わりに、『解決できない形而上学的雰囲気』を好んで置くであろう」（Stein 1903, S.233）という言い回しを下敷きになっている——のように、その両極性を折衷的に一致させているが、レッシングによれば、全体的な傾向としては前者のイメージ、つまり精神史家ないしは文学史家としてのディルタイに偏重していた。よく知られていることだが、敢えて時代証言で根拠づければ、それは「彼の著述がどこかアカデミーの年鑑の中にあっ

り、何らかの学問的な機会に際しての抜刷りであったりする。また、書店では絶版となって、……彼自身の手に入らないこともある。彼自身の意志で、彼の背後におきざりにされているのである」（Hofmannsthal 邦訳, 244頁）という事情があり、またディルタイが一定の締めくくりをつける著書を残さなかったということもあって、彼の体系家としての側面が不透明であったこと、その反面で過去に書かれたものにヘルダーリンに関する文章を新たに加えて1905年に出版された『体験と創作』の成功が、文芸史家としてのディルタイのイメージを定着させてしまったことに原因があった。上述した追悼文の引用における「繊細さ（*fein-..., zart-...*）」という修辭句——シュプランガーも同様に用いている（「偉大で繊細な精神」[N762, S.278]）——は、そうしたステレオタイプの表現である。とはいえ、学問的な公共世界におけるこうしたイメージの定着は既に、トゥービンゲン大学の空きポストを巡って起草されたクリストフ・ジークヴァルトの意見書に始まっているという。つまり、「称賛されるべき繊細さ」とは反対に、体系的叙述に対するディルタイの才能の低さが指摘されていた（vgl. Lessing 1984, S.19f.）。またそれ以前にも私的には、バーゼル大学でディルタイの同僚であったヤコブ・ブルクハルトは、ある書簡でディルタイの「文学史的血管」という素質を高く評価していた（vgl. *ebd.*, S.19）。一方でディルタイの著作の断章性、トルソ的特性——レッシングは「相互に無関係に見えるジャングル」（*ebd.*, S.23）と呼んでいる——が哲学者ディルタイを規定することを妨げた。1912年3月のシュプランガーの追悼講演でも次のように述べられている。「実際彼の中には、彼を詩人、芸術家、人間存在の印象派たらしめる何かがありました」（N072c, S.379; 邦訳206頁）。また、「彼自身の天分は、こうした努力（体系的諸問題という目標への努力）に適したものではありませんでした」とも語られている（N072c, S.382; 邦訳210頁、補足は引用者）。

そして、レッシングが示したディルタイ受容におけるもう一つの紋切り型的イメージは、追悼の語り手に共有されていた『『心理学的』ディルタイから晩年の『解釈学的』ディルタイへの転回のテーゼ』（Lessing 1984, S.23）である。既にエルドマンの指摘したディルタイのヘーゲルに対する態度変更は、その転回を暗示しており、それをエルドマンは「変位（*Verschiebung*）」（Erdmann 1912, S.15）と呼んでいた。フリッシュアイゼン＝ケーラーも固有の経験する主観から全体的経験の分析を行い、その自己省察を文化から補完しようとするディルタイの新たな道程を、必要条件に対する十分条件の証明過程として「逆向き（*rückwärts*）」と表現していた（Frischeisen-Köhler 1912b, S.38）。さらにはシュプランガーも先の3月追悼講演で、エルドマンと同

様に「ヘーゲルへの接近」をある程度認めている。「ディルタイはその最後の仕事の中で、記述的心理学という概念を超え、この構造という概念を導き出しました。彼は、かつて私に向かって『感情とは何か、意志とは何か』と言いました。しかし彼はいまや、こうした抽象的概念に代えて、心の全体を包括する構造というより高度な概念形態を選択したのです、われわれがここにヘーゲルへの接近を見て取る場合、それは確かに間違いではありません。それはその思想家の刷新された研究から生まれてきたものなのです」(N072c, S.383ff.; 邦訳211頁)。1911年の『文化史アルヒーフ』での追悼文でも、「強調されておかねばならないのは、どのような場合にも内在的に捉えられるが、決して一般的な命題へともたらされることのないこの方法(体験された連関である構造を自己省察と理解によって解釈する方法)を心理学として特徴づけるという考え方を、ディルタイが晩年には否定的に感じていたということである。それどころか彼は、意志や感情のような一般的な名称すら信用しておらず、彼は最後の著作でヘーゲルの意図に徐々に近づいているように思われる。客観的精神の問題が主観的体験に対して明らかに前景に姿を現している」(N762, S.275)と同様の内容を記している。このように、繊細な歴史家ディルタイという既に長らく定着したイメージに、哲学者かつ体系家としての晩年のディルタイの再評価と解釈学的転回というディルタイの態度変更という図式が加わる。追悼文の語り手たちはこのイメージの定着に一役買っていた——この転回のテーゼを確定したのが、『ディルタイ全集第七巻』におけるベルンハルト・グレートウイゼン(1880-1946)であった(vgl. Lessing1984, S.24)。ちなみにレッシングはこうしたイメージを修正しようとしてディルタイがその時々の課題にいわば翻弄され続ける「機会哲学者(Gelegenheitsphilosoph)」(Stein1903, S.225)ではなく、十分に可視化できないとしても、彼には歴史的理性批判の理念に基づいて精神諸科学を基礎づけようとする「体系的な強い刺激の統一性」が早い時期から明らかであり、「中期ディルタイと晩年のディルタイとの間のラディカルな断絶について語ることはできない」(Lessing1984, S.30)ことを主張しようと試みるのだが、これは我々の直接の考察の対象とはならない。とはいえ、レッシングの次の二つの文章は、やがて我々の取り組むところとなる課題を含んでいる。すなわち、「特徴的なのは、ディルタイの直接の弟子たちの誰もが彼の体系的な根本問題を捉えていなかったということである」(ebd., S.22)。「ディルタイの中心的な体系的組織が本質的に十分に受け入れられていないか、あるいは受け入れることが不可能であった」(ebd., S.25)。

それでは、以上のようなディルタイ受容史とその解釈を踏まえて、シュプランガーの文章を我々はどのように考え

るべきであろうか。まずは、我々が目にすることのできたシュプランガーのディルタイ追悼の内容を、10月の新聞記事を土台としてまとめてみれば、次のように次のようになるであろう。すなわち、ディルタイは歴史的現実的個性に対する「繊細な感覚」を有し、形而上学的なものに背を向けて、その個性の内実と法則性を、実証主義を考慮に入れつつ文献学的な水準から心理学的なところへと向けて解明していきながらも、そこに相対的なものに対する学問的なわだかまりを常に痛感し、その「法則的構造的なもの」と個別のものの絡み合いの中で体系化に苦慮し続け、再びヘーゲルに辿り着いた。こうしたことをシュプランガーはそこで伝えようとしている。ただ、ディルタイの死を惜しんだ他の人々から彼を際立たせることができるとすれば、ディルタイのヘーゲル再受容の中に、シュプランガーが「政治的」というニュアンスを、誰よりも早く文字にしていることである——「ディルタイは、ヘーゲルの意図を新しい政治的土台の上で実行した哲学的地位を手にしていった」(本文参照)。フリッシュアイゼン＝ケーラーが政治的なものをディルタイの教育学構想の中でのみ指摘していたのすぎなかったのに対して、シュプランガーはディルタイの体系化への努力の中にまでそれをいわば拡張して見ているようである。(ここにはシュプランガーにおける教育と政治を、吟味しないままに議論する「ドイツ性」(Himmelstein 2013)の端緒、あるいは後にジョルジュ・ルカーチ『『理性の崩壊』』によってディルタイの無意識的な加担にまで遡及裁判される問題の端緒を推測することもできる)。事実、この新聞記事から数カ月後の3月追悼講演では、次のように語られている。「彼にとっての究極的理想は、精神を操縦することをも可能にする、つまり社会の工学(Technik der Gesellschaft)をも可能にしてくれる精神科学だったので。ディルタイは、複雑に絡み合う精神生活(文化)の熟慮を、応用政治学、実践的社会理論、歴史に基礎づけられた教育学へと拡張したいと考えていました。……ただディルタイは、目の前にした生の非合理性に対する彼の完成ゆえに、ミルよりもはるかにそうした課題の困難さを深く自覚していました。……それゆえに、彼の努力は最初から、精神科学の独自性を自然科学的な法則概念の専制から守ることに向けられていました」(N072c, S.380; 邦訳207頁)。これはディルタイ哲学の実践的可能性を指摘するものであり、それ故に教育学の新しい可能性、やがてヴァイマル期において単に学校の知的教育にとどまらず、芸術教育や職業教育、障害者教育、幼児教育、職業教育、国民教育、さらには教員養成にまでの広がる将来構図を予感させるものである。残念なことに、後のシュプランガーはディルタイの教育学の可能性を「社会の技術」どころか、ディルタイ自身が時代錯誤と考えていた「共同体の手仕事」に

まで貶めてしまうのであるが (vgl. Hermann1971: S.192), ディルタイの死の直後の段階では自らの恩師 (?) ——シュプラランガーの学位論文においても、教授資格論文においても指導者ではなかったディルタイ——から遠ざかることはない。例えば、1912年の書評ではディルタイの死を嘆きながら、彼の体系的研究の「直線的な継続形成」を認め、それを「高齢でも……全体的計画と位置を我々にはつきりと示すことを続行することに少なくとも彼は成功した」としている (LbDilthey1912, S.611)。ここには多少の違和感も感じられないわけではない。

ところで、多くの追悼を残したシュプラランガーであったが、恩師ディルタイに我々が疑問符を付けざるを得なかったように——師への不信は本文でも感じ取れる——、それらが心からの哀悼からなされたものであったのかどうかについても多少の疑問が残る。例えば、後年の文章では、理論的にディルタイを受容したわけではないことが分かる。1935年の『ディルタイ全集第九巻教育学』に関する書評では、シュプラランガーはディルタイをほとんど実証主義者扱いにしている (N383)。また、晩年の「精神科学的心理学の成立史」についての当時まだ未公開であった文章では、自ら指摘したディルタイの解釈学的転回を否定するかのようになり、「ディルタイは『精神科学的心理学』という表現には何らの貢献をすることがなかった。その表現は……私によって用いられたものであり、『精神諸科学の基礎としての心理学』という言い回しを簡潔に切り詰めたものとして用いられた」(EgP, S.150) としている。また、確実にシュプラランガーに理論的影響を与えたと言われるのが常のディルタイの死に対して、追悼を行っていた時期の彼は、心情的にはかなり醒めたものであったとも言えるかもしれない。というのも、例えばケーテ・ハートリヒ宛のシュプラランガーの、ほぼ毎日の日記のように書かれていた書簡を見る限りにおいては、ディルタイ死去の報告は、死の直後でも、またその後の数年でも皆無に近いからである。したがってその事実に対する彼の心理状態を知ることにはできない。それでも、新聞記事発表一週間後のケーテ・ハートリヒ宛の書簡で、その記事についてようやく語られる程度であり、その内容には恩師ディルタイに対する哀悼の気分も感じられない、かなりそっけなく打算的なものである——「ディルタイの追悼文はほんとに熱狂を呼び起こしました (私には75マルクがもたらされました)」(ES-KH, 30.Okt.1911)。さらに、1912年の追悼講演直前には、ケーテ・ハートリヒに次のように記している——「ベルリンに再び着いて6日後です。……午後、私はディルタイ講演の作業をしていま

した。それは私にとって再び容易ならぬ、報酬もない義務のように思われます。と言いますのも、この企てはうまく組み立てられていないからです」(ES-KH, 13.M?rz 1912)。その数日前にも彼は講演の内容の品位にこだわっている。「ディルタイの講演に行かねばなりません。美しい文章になるといいのですが」(ES-KH, 07.März 1912)。品位ある追悼が彼にもたらした熱狂、これはディルタイの死を媒介として得られた自己表現でもあった。シュプラランガーによる追悼を要約してみれば、次のようなものであったと言えるであろう。つまり、彼は哲学者としてのディルタイを認めながら、その後長らく支配的なイメージ、つまり「心理学的観点から解釈学的観点へと転回したディルタイ」という——「繊細な歴史家」という従来からのものと並ぶ——新しいイメージを定着させる舞台で、ディルタイ追悼に関係した人々と共に、あるいは追悼の数からすれば彼ら以上に重要な配役を務めた。しかし、シュプラランガー自身はそうした解釈を自ら行いつつ、少なくとも「現世的敬虔」に関するノイエ・キルヘ講演 (1940年) において形而上学的な傾斜を示すまでは、記述的分析的心理学を核とする中期ディルタイにとどまって、彼なりのその修正的受容に努め、精神科学的心理学の構想を推し進めていたようである。つまり、ディルタイの「解釈学的転回」を示しつつも、自らは独自の道を歩んだ。他方で同時に、多くの追悼関係の文章の背後には、シュプラランガーが追悼を利用して、しかも複数回繰り返すことで「ディルタイの弟子」としての自らの立場のいち早く公に示す政治的駆け引きという側面もあったと考えることもできる。一時期、不和な関係を経験した彼は、それが解消した後に改めてディルタイの弟子、しかもいわば「直系の弟子」であることを学的世界に印象づける必要を感じたのかもしれない。他のディルタイの弟子たちと比較しても、ディルタイの死後の対応が非常にほどに即妙で多産であったのには、こうした事情も働いていた。こうした意味において、ヨーロッパの追悼文という「ジャンル」は、単に哀悼の表現とは異なる政治的道具でもあったと考えるべきでもあろう——その社会的機能は公開書簡とも類似している。以下の翻訳はそうした西欧的傾向の一事例である。それは追悼という絶好の機会を利用したデモンストレーションであった。ただし、彼はディルタイへの追悼で多くを語らなかったとしても、彼の中に実践的社会的理論的なものや国民教育的なものという教育学の方向性も見ており、この課題は後々彼の中心問題となっていて、それはディルタイからの (問題をも孕む) 新しい遺産であった。



## 【解題注記】

1) シュプラランガーの新聞記事におけるディルタイ追悼のための補完としてこの解題で用いたのは以下のものであり、文章中では略号を使って引用する。なお、本稿は、私の同僚である村若修教授との、彼の研究室における（和みつつも知的興奮を駆り立てる）対話がなければ、成立しなかったであろう。ここに感謝の心を示したい。

Erdmann1912: Erdmann, Benno: Gedächtnisrede auf Wilhelm Dilthey. In: Abhandlungen der preußische Akademie der Wissenschaft. Philosophische-historische Klasse. Berlin: Verlag der königlich Akademie der Wissenschaft. 1912, S.1-18.

Frischeisen-Köhler1912a: Frischeisen-Köhler, Max: Wilhelm Dilthey †. In: Kant-Studien. Band 17, 1912, S.161-172.

Frischeisen-Köhler1912b: Frischeisen-Köhler, Max: Wilhelm Dilthey als Philosoph. In: Logos. Band 3, 1912, S.29-58.

Gerhardt/ Mehring/ Rindert1999: Gerhardt, Volker/ Mehring, Reinhard/ Rindert, Jana: Berliner Geist. Berlin: Akademie, 1999.

Hermann1971: Hermann, Ulrich: Die Pädagogik Wilhelm Diltheys. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1971.

Himmelstein2013: Himmelstein, Klaus: Das Konzept der Deutschtum. Studien über Eduard Spranger. Frankfurt a. M.: Peter Lang, 2013.

Hofmannsthal1911: Hofmannsthal, Hugo von: Wilhelm Dilthey[1911]. In: ders.: Gesammelte Werke. Frankfurt a. M., 1979. (邦訳: 『フーゴー・フォン・ホフマンスタール選集』第3巻「論文・エッセイ」, 河出書房新社, 1991年, 241-244頁)。

Lessing1984: Lessing, Hans-Ulrich: Die Idee einer Kritik der historischen Vernunft. Freiburg/ München: Alber, 1984.

ES-KH...: Briefwechsel zwischen Eduard Spranger und Käthe Hatlich. Digitale Bibliothek der Bibliothek für Bildungsgeschichtliche Forschung des Deutschen Instituts für Internationale Pädagogische Forschung. URL: <http://bbf.dipf.de/digitale-bbf/editionen/spranger-hatlich>. Zitiert als ES-KH, Briefdatum.

N065: Spranger, Eduard: Wilhelm Dilthey. In: Der Zeitgeist. Beiblatt zum "Berliner Tageblatt". Nr. 23. 23. Oktober 1911. 本稿における訳の文章である。

N072: Spranger, Eduard: Wilhelm Dilthey. Eine Gedächtnisrede, geh. in der Societas Joachimica zu Berlin. Berlin/ Leipzig: Wiegandt, 1912[N072a]; Auch: In Spranger, Eduard: Vom pädagogischen Genius. Lebensbilder und Grundgedankern großer Erzieher. Heidelberg: Quelle & Meyer, 1965[N072b]; in Eduard Spranger Gesammelte Schriften Band11, Heidelberg: Quelle & Meyer, 1972, S.376-388[N072c]. (邦訳: 「ヴィルヘルム・ディルタイ——追悼講演」[村順南訳], 『ディルタイ研究』第20号, 2009年, 201-218頁)。

N383: Spranger, Eduard: Rez.: Dilthey, Wilhelm: Gesammelte Schriften. Bd.9: Pädagogik. Geschichte und Grundlinien des Systems. (hrsg. V. Otto Friedrich Bollnow)- Leipzig/ Berlin: Teubner1934, In: Zeitschrift für Geschichte der Erziehung und des Unterrichts. Jahrgang 25, 1935, S.222-226[N383a]; Auch: In: Spranger, Eduard: Vom pädagogischen Genius. S.216-226[N383b].

N762: Spranger, Eduard: Wilhelm Dilthey †. In: Archiv für Kulturgeschichte. Band 9, 1911, S.273-278.

LbDilthey1912: Spranger, Eduard: Der Aufbau der geschichtlichen Welt in der Geisteswissenschaften[Literaturbericht]. In: Historische Zeitschrift. Band 108, 1912, S.611-614.

EgP: Spranger, Eduard: Zur Entstehung der geisteswissenschaftlichen Psychologie[ca. 1955/56]. In: Eduard Spranger Gesammelte Schriften Band 4, Tübingen: Max Niemeyer, 1974, S.148-156.

Stein1903: Stein, Ludwig: Wilhelm Dilthey. In: Deutsche Rundschau. Band 117, 1903, S.222-233.

Tumarkin1911: Tumarkin, Anna: Wilhelm Dilthey. In: Archiv für Geschichte der Philosophie. Neue Folge. Band 15, Heft 2, 1912, S.143-153.

\* \* \*

## 【本文】

ヴィルヘルム・ディルタイが不帰の客となった。ここ数日、いくつかの言葉が彼の思い出のために記されたり、語られたりしている。だが、棺台にあって自らのライフワークを僅かな簡潔な文章で十分にまとめることができた人物に、彼がなることはなかった。私たちが感じるの、何らかの比較にならないほどに偉大なものが私たちから去ってしまったということだけである。けれども、かつての時期の霧が光を当てられ、彼が昼のような明るさの中で私たちの前に姿を現わす場合に、そして最高のものとして彼自身に認められている新感覚 (Organ) に対して、つまり歴史的理解に対して把握可能となる場合に、そのとき初めて私たちは彼の完全な姿を見ることであろう。

この訃報はどのような考えを呼び起こすのであろう！——私たち若い者たちが隠し立てしないと思うのであれば、私たちの師を彼の最も深い人間的器質においてよく分かっていないことを告白せざるを得ない。彼と同時代のかつて若く、彼が自らの波打つ心の領域を打ち明けた人々は、とうの昔に他界している。私たちは彼の著作や彼の講義を通して彼のところへやってくる。そして、彼を見出し、事象に完全に心奪われ、その学問によって情け容赦のないところにまで、世界と人間とを忘却してしまうところにまで満

たされたが、彼は世界と人間の最も固有な生を、平素は僅かばかりの古い紙片から最も繊細な息づかいに至るまで聞き取ることを知っていた。彼の心がどのように活動しているのかを私たちは感じたが、彼の心を見ることはなかった。彼の本性の比較を絶した計り知れないもの、見積もることのできないものは、彼に近づく者の誰にも、もっぱら天才性から出てくる秘密に満ちた力で影響を及ぼした。そして彼は私たちの多くに、私たちの精神の様式と最も内面的な織物に至るまで入り込んで非常に深く影響を及ぼした——けれども、私たちに流れ出ている以上にまだ無限にかなり多くのものが彼の中にはあるという印象を、誰もが持っていた。ときにはこの覆いを通して非常に温かい愛情の光が、彼の弟子についての心からの気遣いの光が割って射し、巨大な力が私たちを彼のところへと引き寄せ、まるで突如とした日の光の中にいるように、彼の心情が私たちの前で展開された。そのような瞬間を経験している者なら、熱狂的な愛情で彼に忠実であり続けねばならなかった。しかしそれだけに、この素晴らしい人物にどのように接し、彼の比較にならない才能に固有の価値を通していかにして報いることができるのかという問題はより大きなものとなった。

私たちの愛情はこの真剣な時間の中で語ることを望んでいる。その愛情が語りたがっているのは、なぜ私たちがディ

ルタイを私たちの時代の最も深い哲学者であると考えていたのか、彼の意志が何であり、彼の著作が何であったのかということである。だが、まさにここで故人の姿は、静かに自己吟味するように私たちを促している。私たちが思い出すのは、人間の個性の秘密に対する非常に繊細な感覚を授かっていた彼が、人間の個性について発言しそれを描き出すことができはずの、その瞬間に、か弱い内気さでどのようにして手を引っ込めたかということであり、半ば不安げに、半ば恭しくいかにしてヴェールを再び掛けたかということである。私たちがディルタイを総じて理解することができるのであれば、この点からのみであろう。

「個体とは把握不可能である (Individuum est ineffabile.)」という命題と同様に、彼は何らの発言をしないことがかなりしばしばであった。けれども、この命題は彼には認められていなかった。むしろ、彼の闘い全体は、個性においてもまだ分析と記述を通して内的構成を心理学的に、また歴史的に解明するという目標、単に個々の人間の個性ばかりでなく、世代の個性や文化時期の個性をもそうするという目標に関わっていた。自然科学のアナロジーという奴隷状態から解放されるであろう精神諸科学の新しい方法論的基礎づけが、彼の頭には浮かんでいて、したがって、ディルタイが何よりも歴史家であったのかどうか、あるいは彼が体系家であったのかどうかは疑うことが可能である。一般的な見解は歴史家であることに傾いている。その見解は一面的である。もし彼が自らの生きる時代を類い稀なシュライエルマッハーを越えて跡づけていたとするなら、幾つかの点では彼に類縁するが、多くの点で異質でもあったこのシュライエルマッハーという人物の魔力に彼を引き込んでいたという現象は単独のものではあり得なかった。ディルタイの中には実証主義的な素質もあり、それは認識、冷たい法則性、連関、相関、それどころか体系性をどこまでも要求していた。それ故、彼が個性の中で探し求めていたのは、個性に固有な法則、持続的な構造、いわば人格的な結晶化の形式であった。これは彼の傑出した学問性であり、それが彼を『シュライエルマッハーの生涯』から『精神科学序説』へと必然的に駆り立てたものであった。最後の日に至るまで、生のこの隠れた自己運動、シュライエルマッハーという現象を取り出した自己運動に、彼は心奪われていた。私は晩年の原稿を見ることを許されたが、それはこの本性が一つの深みと最も内面的に連関していることを言い表しているものであり、その深みは私たち手にすることのできるシュライエルマッハーの伝記の熱烈な崇拜者ディルタイでさえ予感しないほどである。——これらはみななげ埋もれたままであるのだろうか。大量の部分完成している、その伝記の第二巻はなぜ一度も締めくくられなかったのだろうか。

ところで、ここにはディルタイの本質の第二の傾向が働いている。それはコントの遺産とは別に新しいもの、おそらくはロマン主義への彼の親和性によって準備されたように思われる、予想だにされなかったものである。すべての哲学以上に深く彼の心をとらえたのは、生きることの秘密 (das Geheimnis des Lebens) であった。概念の建築学ではなく、体験が彼を哲学へと導いたが、哲学の貧困から彼は再び生へと帰還することを見出した。つまり、彼はいかなる定式も破壊する。発見の喜びに満ちた新参者や立場の解釈者 (そうした人々はまさにシュライエルマッハー文献においては珍しい者ではない) を必然的に疑いへと駆り立てる用心深さが、彼を鼓舞していた。「個体とは把握不可能である」。最終的にはやはり、何らの概念も精神世界の生き生きとした流れを埋め合わせることはない。いかなる分析も、私たちが考え私たち自身の中で独創的な力で働いていると感じている分割不可能な一体性を再び与えることはない。ヘーゲルの概念的信頼は哲学の死であった。つまり、いかなる最終的な言葉にも、私たちは不信感を持たねばならない。体験が完全なもの、全体的なものである——いかなる体系化もこの繊細な織物を引き裂く。それ故にディルタイは、自らのそれぞれの叙述に関して、私たちがうっとりさせる彼の芳香を叙述を越えて放った。とはいえ結局、私たちが既にはっきりと目にしていると思っていた輪郭を再びぼやけさせている。

哲学と生の関係は、彼の最も固有の闘いの場、彼の最も深い諸経験の場である。彼が私に語ったように、これに関してはかつての時代の原稿は失われている。彼の生の直観は、彼が希求して闘ったようには、哲学にはなり得なかった。哲学が普遍妥当性を土台にして自己運動することを、おそらく彼は分かっていたであろう。彼の根源的な論理的な素質は強くなかったが、あらゆる諸概念に関する論理的良心は厳密であり繊細であった。したがって、彼は非常に誠実で、現実存在によって非常に深く心をとらえられ、現実存在であり得るためには非常に豊かであった。それ故にヘーゲル以上に彼を深く動かしていたものとは、世界観を語り世界の体験から近づいていく哲学の姉妹、つまり芸術と宗教であった。

芸術は具体的なものにおいて一般的なものについて語る。この新しい世界がいかにして発生するかは体験や構想力からどのように発生するか、この覆いをディルタイは彼以前には誰もしなかったように取り去った。こうして彼に対して、精神生活を観察し判断する新しい様態が現われてきた。詩人の偉大な創造においては想像力の戯れ以上のものが維持され、そしてその創造においては世界観や世界体験が維持されていることを、彼は比類のない著作の中で叙述した。それらの著作が彼の品位ある手稿の一つを将来的に私たち



に崇敬の念に溢れて集めることが望まれるところである。それらの著作を通して初めて文芸史は、単に文献学的な水準から心理学的な学問へと高められた。15世紀や16世紀、啓蒙、古典主義、ロマン主義の人間は、その構造と内的な生の編成において、ディルタイによって初めて私たちにとって可視的なものとなり、この領域においても彼の場合には、新しい体系化が非常に繊細な歴史的天才性と結びつけられた。

だが、哲学や芸術の根本に、さらにもう一つのもの、つまり宗教性が食い込んでいる。ディルタイが宗教に概念規定を与えることは、決してなかった。しかし、聖別や敬虔といった彼の言葉から鳴り響いているもの、これは根幹への沈潜、現実存在の源泉との非常に直接的な接触であった。言語の抵抗と悪戦苦闘しながら、彼はこの究極の諸経験のそれぞれを「生の紐帯」と呼んだが、それは例えば、彼にとって芸術において「現実存在の関係」であったものに類似している。どのような超越的なものも、またどのような神と人間の交互関係も、ここでは彼にとって拭い去られている。従来の宗教性は魔術主義、双方向性に由来している。近代の意識は彼の深みにおいて、主観が客観的連関と半ば仮借なく、半ば無意味に結びついている紐帯を体験している。彼が哲学と哲学史を、例えば1901年から1903年までの冬学期の古典主義の講義で数百の聴講生を前に展開したように、今や哲学とその歴史の彼の理解もこの究極の源泉において掘り下がっていった。

歴史的意識と美的領域はディルタイの中で共同して働いており、それらは彼をそれぞれの一面的な生の解釈を越えて出て高めた。おそらく、近代の人間の誰もが相対的なものの苦悩を、彼ほど激しい力で経験せざるを得なかったことはなかったであろう。彼の本性の全面的な感受性は、精神的歴史的生の深みを、ある世代がかつてヘーゲルの体系性の確固としたカテゴリーにおいてまだ包括していたその深みを彼に明らかにした。これらはみな彼にとって、生き生きとした雑踏、諸形態の混乱した大海、芸術の具体的なイメージ、宗教のイメージ言語となった。固有の生は、歴史のこの多くを解釈することに属していた。実際には長らく、あたかも歴史研究が私たちの偉大な教師の精神を完全に捉えて離さなかったかのように現われた。かつて疑っていた者は、やはり内的な秘密に満ちた衝動が自らを体系的なものへと突き動かしていることを晩年の著作によって教えられざるを得なかった。たとえ彼が歴史的研究していた場合でさえ、彼は精神の構造を捉えようとしていた。歴史は彼にとって、彼の精神科学の理論の源泉あるいは試金石であった。さらに最終的に彼は、このより高次の意味において啓蒙の展開を取り扱った。最後のアカデミー論文は、その一部が印刷されたにすぎないが、たとえ現代の論理学者にとっ

て幾つかの補完が保留される場合でさえ、将来のいかなる精神哲学に対する土台を形成するであろう精神科学の基礎づけを含んでいる。この業績に関しては来るべき時代が決定を下すことができるであろう。とはいえ、「記述的分析的心理学」に関する、「16世紀と17世紀の文化における人間学の機能」に関する（これに彼は特別な価値を置いていた）、そして「精神諸科学における歴史的世界の構成」(1910年)に関するアカデミーの諸論文の著者ほどに誰も、そのように広い土台の上に、そして非常に真正な学問的感覚でヘーゲルの意図を継続しなかったことはかなり確かである。

偉大で芸術的で学問的な器官で、彼は精神世界を包括したが、その器官は理解であった。この機能の理論のために、認識理論の僅かに建て増しされた分枝のために、さらに多様な印刷されていない諸研究が存在しているが、それらはシュライエルマッハーの解釈学の理念と意識的に結びついている。もしディルタイ固有の精神構造を定式化しようとするれば、理解のこの才能を彼の組織立ての中心点として特徴づけねばならない。法則的構造的なものとの単独のもの絡み合いは、その才能の中で半ば意識されないままに明るみに姿を現わしている。彼は認識の学問的衝動から出発するが、諸概念のありのままの姿において自らの結論を打ち立てることはできていない。むしろ、彼は認識を再び完全に生き生きとした現実の詩的輝きで、かつて引き合いに出された路線をほとんど悪戯半分に不確実性にまでぼかしつつ扮装している。これが彼の伝記的著作の芸術的なものをなしており、彼が最後の年にもなお自らの「シュライエルマッハー論」で物怖じしつつもひどく過敏なものと感じようとしていた軽妙な若者らしさをなしている——それは彼が自らの独自の根源的な精神組織の原理以前に手に入れていたものであった。「理解がすべてである」。けれども、——彼の中にはすべての現実的なものの理性性についてのヘーゲルの静寂主義的な根本命題がいかに無限に深められていることだろうか！ディルタイは相対主義者と呼ばれてきたが、規範的観点の精力的な代表者である彼は、自らが「価値の無政府状態」を終わりにすると主張している。幸運なことに、確かな足取りで緊密な領域を前進した者とは誰であろう！だが、私たちディルタイの弟子たちはこの幸運と交換に、彼が私たちに道を開いた生の理解の領域を手に入れたいとは思わないし、またこの幸運と交換に、彼が私たちにいかなる形而上学、言葉で手早く仕上げた私たちに精神的歴史的世界の混乱に導きの糸もなしに立たせる形而上学に反対して闘い通そうとする精神のリアリズムを得たいとも思わない。

ここで私たちはディルタイの精神的構造における最も重要な問題に触れてみよう。彼の近年の公刊物が示しているのは、彼の長いライフワークのもう一つの獲得物が、自由

の理想主義、客観的理想主義、実証主義という三つの世界観の分枝のように、彼の関心事ではほとんどなかったことである。疑いもなく、歴史的理解は、持続的な法則性に基づく世界観形成の根本的諸形式を発見した。その形式を増やしたり、混合形式によってニュアンスをつけたりしているけれども、そうした。しかし、世界観の三位一体において終わりを告げる哲学について、何が考えられるべきなのであろうか。芸術家ゲーテが許していたものは、普遍妥当性と客観性の召使いである哲学にも許されているのであろうか。

こうした三分法がディルタイにとって最終的な言葉を意味していると信じようとするならば、それは大きな誤解であろう。むしろ、この三つの観点それ自体の客観的理解において、その観点の個々それぞれを越え出ていることは必然的である。観点のこの三重の可能性にある悩ましい相対主義的なものは、私たちの教養の歴史的意識を授ける普遍的フマニテートにおいて克服される。一般的な生との接触のこのかぐわしい獲得物が、ディルタイが基礎づけた新しい歴史の哲学である。形式的理想の蒼ざめた形態でのみ、具体的なものへと方向づけられたディルタイの精神は、私たちの古典のフマニテートの理念を拒否しているにすぎない。根本的に彼は完成された仕方で、ゲーテがヘルダーに予感していたフマーヌスであった。見通し難い時代と世代の歴史と体験を担っている歴史家が、この拡大された生の意識に基づいて自らの哲学の内実、つまり定式の哲学ではなく、超個人的な意義について努力して闘い取られる生の観点を有している。彼は歴史が私たちに与えることのできる非常に豊かな獲得物、つまり固有な自然の一面性を越え去り、思想の純粋な明瞭性においてありありと分かる一つの生の立脚点、もちろん闇の力とは異なるものを支配しているものだが、そうした獲得物を自らに吸収していた。彼は単に自由の理想主義者でも、客観的理想主義者でも、実証主義者でもなく、むしろ彼は同時に、世界の生き生きとした連関の中に自ら独自の創造的で作用を及ぼす生の原理を見ている。そして、それらすべてを、彼の生涯に優位である個別の相関関係の反省的意識の中で捉えている。こうして歴史と理解は私たちを自己自身を越えるように導く。歴史と理解とは私たちの中で、哲学的あり方の生の編制、同時のその目的論的な構造によって、ヘーゲルが象徴的に「絶対的精神」と呼んだものへと邁進する文化において客観化された精神との接触を私たちの中で基礎づける。

この意味においてディルタイは、ヘーゲルの意図を新しい政治的土台の上で続行した哲学的地位を持っていた。彼がまさに『ヘーゲルの青年時代』を書いたのも理由のないことではない。というのも、ヘーゲルに関して彼を鼓舞していたものとは、彼の精神の永遠の若者らしさであり、体

系を不毛さから非難することではなく、むしろ生自体の非体系性への洞察からそうする生の脈動に対する告白だからである。

いま、この精神の持ち主は安らいでいる。——よそよそしい力が彼を強いていた。彼自身、その最後の日に至るまで活動し、計画し、望みを抱えていた。ティロルの最後の休暇中に私に送ってきた複数の手紙で、彼はおそらく年内にまとめたいという計画を構想していた。彼の研究の運命が彼を動かしていた。眠りが彼の夜から去ってしまうとしても、彼は一度も自らの課題を見失うことはなかった。彼のライフワークは全体であり、彼を相対主義者と呼ぶ者は、彼の精神の幅と大きさを誤認している。確かなことは、近い将来、この天才の内実が知れ渡ることである。彼の歴史的意識の中には、人間精神の完全な運動が包括されている。

\* \* \*

(2015年12月11日 受理)